農　大　情　報

平成24年７月・８月合併号
編集発行：愛知県立農業大学校

青年農業者リーダー研修で農学科卒業生が講演

本校研修部は農業者を対象とした生涯教育研修を行っています。７月10日には愛知県国際農友会と共催で「海外農業の現状と海外農業研修」と題して海外農業研修制度の紹介や研修経験者の報告を内容とする研修会を開催しました。

研修経験者として本校農学科を卒業して平成19年にアメリカへ派遣された跡治智則君と同じく平成22年にドイツへ派遣された山岡鷹靖君の２人が報告を行いました。

跡治君からはコロラド州の耕種農家で体験した大規模な小麦やトウモロコシ、牧草栽培の状況や自分がどのような役割を担ったかの話がありました。また、帰国後、稲作農家に就職し、地域や国際農友会の人脈を築きながら借地を進め、現在、独立に向けて取り組んでいる状況の紹介がありました。

山岡君からはドイツの大規模な果樹農家で体験した果実の収穫方法や剪定方法が日本とは全く異なること、直売を主体とした特徴のある流通・販売方法などの紹介がありました。最後に、どんな理由でも良いので外国に興味があれば海外農業研修に参加すべきとのアドバイスがありました。

来年１月末にオーストラリア派遣研修が予定されている農学科２年生も本研修を受講しました。（稲吉金一）

オープンキャンパス「農大発見の日」

農業大学校に関心のある方々を対象としたオープンキャンパスを６月に２回開催しました。学校の概要説明と施設見学が内容ですが、県内外の高校生とその父兄、専門学校生、社会人など82名の参加がありました。遠くからでは、鹿児島県の高校からも参加がありました。

終了後、入学に関する相談や卒業後の進路、学校生活に関する質問や相談を受け付けましたが、皆さん大変熱心でした。
（今井吉晴）

緑の学園研修を実施しました

主に高校生を対象に、農業大学校での農場実習を体験することで農業への関心を深めることを目的とした緑の学園研修を実施しました。

農業係高校３年生を対象とした７月30日から１泊２日の農業体験学習では、27名が参加し、農大の概要説明や校内見学の後、各々が選択した２つの専攻実習を体験し、農作物や家畜・家きんの生産・飼養方法や学習内容などを学びました。夜は宿泊先の愛知県青年の家で農業大学校の学生と交流を深めました。

また、１日農業体験学習のコースを夏休み期間中に４回実施したところ、定員80名を上回る98名の参加をいただきました。これは、例年よりホームページを見て申し込んだ人が多かったためと思われます。参加

者は、希望する体験区分に分かれ、農作物の管理作業や収穫調製作業、牛の給餌作業等を行いました。気温の高い環境下での農作業でしたが、真剣に取り組み、とても楽しかったという感想が聞かれました。

なお、８月７日の研修の模様は、９月22日放映の県広報番組「SKE48のあいちテル！」で紹介されます。（玉越千賀子）

は種作業を体験する高校生

農業者育成支援研修始まる

本年度、新たに新規就農を希望する方を対象として、７月10日から半年間にわたる研修が始まりました。これは農林水産省の青年就農支援事業を活用して開講したものです。受講者募集の結果、19名の応募があり、就農への関心の高まりを改めて実感させられました。

受講者の多くは、自家の農地を活用したい中高年層で、基礎から野菜づくりを学びたいという意欲の高い方々です。

研修は12月27日まで、週３回の実習と10回の講義が予定されています。（土屋明彦）

大型特殊免許・けん引免許の取得研修

農業機械グループでは、本校学生の資格取得のための授業を受け持ったり、農業者など県民の方々を対象とした各種農業機械研修を実施しています。中でも大型特殊免許研修は主要な研修であり、年間６回の開催計画の内、既に２回が終了しており、本校学生と県民の方々併せて59名が技能試験に合格し大型特殊免許証（農耕車限定）を手にされました。

トラクタは一人乗りのため普通乗用車のように助手席からのアドバイスはできませんが、トラクタにトランシーバーを装着して走行中の悪い点を研修生に逐次指摘するなどの対応をしています。

また、夏休み期間中にはけん引免許研修を実施し、本校学生７名と県民の方１名の受講生全員が技能試験に合格し、けん引免許（農耕車限定）を手にされました。

けん引の運転で一番難しいのは方向転換（車庫入れ）です。研修生は、酷暑の中、何度も何度も練習を繰り返し、ハンドル操作や車両感覚を身体に覚え込ませていました。（水野英之）

畜産専攻県外研修

7月17日から19日にかけて畜産専攻２年生17名（酪農11名、養豚養鶏６名）は三重県に校外学習に行きました。１日目の午前中は鈴鹿市の株式会社セイワの本社を見学しました。ここは発酵生成物製品の生産販売を行う企業です。プロジェクト学習で使

っている製品もあり、比較的馴染みがあるため、その製造過程や試験研究の話を聞くことで学生の理解は一層深まったようです。

次に昼食と兼ねて松阪牛の試食を行いました。牛肉はＡ５ランクの最上級のもので、とろけるような食感を堪能しました。

昼食後は伊賀市のモクモク手作りファームを視察しました。施設案内や搾乳体験の後、ファームの説明を聞きました。伊賀豚のブランド化から始まり、色々な加工品の開発、農業公園を作ったり農業体験を経て食育に力を入れていることなど、非常に新鮮で感心させられる話を聞くことができました。宿泊はモクモクファームのコテージを利用しました。特にエコに気を配るように設定された施設では、コテージごとに節電を競い合う仕組みになっており、ゲーム感覚で節電を学習する工夫がされていました。

夕食と朝食は主に地元の農畜産物を利用した食事になっており、地産地消、食育を考えた取り組みを徹底していると感じられました。

２日目はジャージー牧場での作業を行いました。ジャージー牛20頭ほどの牧場で牛乳の処理施設も牧場内にあり、搾乳後すぐに殺菌処理され、レストランや直売に直行しており、学生達の関心を引いたようです。搾乳作業は、普段、学生達が手慣れているミルカーによる搾乳ではなく、一般体験客向けの手搾りでした。また、珍しいジャージー牛のみの牧場に感動を覚えたようでした。

次にファーム内の体験施設でソーセージ作りを行いました。学校でも以前、実習で行いましたが、今回は本物の羊の腸を使うなどより本格的であり、また違った雰囲気の実習を行うことができました。

今回は特に食育について勉強になることが多く、充実した校外学習となりました。（河野朋之）

イチゴ専門高度化研修

農業大学校では農業経営の高度化を進めるため、県内共通の部門別新技術・知識及び地域活性化に必要な知識・技術の修得を目的とした農業者向けの専門高度化研修を実施しており、本年度は９回の研修を予定しています。

７月26日には、イチゴの生産安定を内容とした研修会を165名の参加を得て開催しました。

当日は、イチゴ栽培における環境制御に関する研究動向、遮光資材・細霧冷房を利用した高温対策技術の現地実証の成果、本県におけるイチゴ新品種の育成状況、交配用みつばちの情勢と管理マニュアルについて、イチゴに関する消費者意識調査、イチゴの販売情勢についてなど、イチゴの栽培

に関する課題解決から消費動向・販売情勢まで各関係者から多方面にわたる内容で講演がありました。（稲吉金一）

花き専攻県外研修

６月12日及び13日、切花専攻と鉢物・緑花木専攻の２年生22名が、県外学習のため、東京都に行きました。視察先は大田市場花き部に入場しているフラワーオークションジャパン（ＦＡＪ）と、小売店の青山フラワーマーケットアトレ大森店です。

12日に視察した青山フラワーマーケットは、駅ビル内の小規模店舗ですが、カジュアルでスタイリッシュな店構えで、高品質の切花がセンス良く飾られていました。当日はヒマワリとクチナシがメインで売られており、通勤帰りの若いＯＬが立ち寄っては花束を購入していました。１本当たり価格は決して安くはないですが、500円以下のミニ花束も多く、気軽に買える雰囲気になっていました。

13日は、朝８時からＦＡＪのセリの様子を見学した後、切花部と鉢物部の各部長から話を伺いました。ＦＡＪではセリ下げ方式の時計ゼリが使われ切花のセリが行われていましたが、学生からはセリのスピードのあまりの速さや、同じ品目でも大きく価格差があることに、驚きの声が上がっていました。

また、おばちゃんが日本の花の消費を支えているという説明に、学生も実習販売の情景を思い浮かべて納得していました。質疑応答では、学生から輸入と競合しない品目はあるのか、消費者から多いクレームは何かなど、実際に経営を意識した質問が出されていました。

今回の県外学習で、学生は全国的な花き産業の動向や、最先端の流通、販売方法を学ぶことができ、今後の就農、就職に向けて大きく視野を広げることができたと思います。（坂場功）

セリの様子を見学

市場の方から説明を聞く

後援会地域研修会開催

農学科の保護者が後援会を組織し、学校と連携を持ちながら学生の学習・学校生活の支援を行っています。

４月に総会を行い、年数回理事会を開催して会の運営を行っています。また、例年は７月に５つの地域ブロックに分かれて研修会を行います。本年は６月29日の田原地域を皮切りに７月６日に尾張海部及び西三河地域、７月13日に知多及び東三河地域で研修会が開催されました。各地域の後援会員と農学科職員、地域の農業改良普及課職員が出席して、意見や情報の交換を行い、会員相互の親睦を深めました。（後藤玲司）